



D e s i g n

～ 換 気 を 徹 底 し ま し ょ う ～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

D e s i g n 号外 81 号です。第 20 回病診連携会議の報告と、認知症家族教室の報告を記載しています。（地域医療連携室 室長 南出 弦）

地域医療連携室より

～ 第 20 回病診連携会議が開催されました ～

9 月 2 日（土）、第 20 回病診連携会議が開催されました。1 度だけ、台風の接近により延期となったと記憶していますが、コロナでも中止になることなく継続されている会議です。今年度は、「災害時における病診連携体制と、3 病院の在宅支援体制について」と題して開催されました。ここ数年はコロナをテーマとした内容でしたが、コロナ以外の内容での開催は 4 年振りです。



会議は、岸田相楽医師会会長による開会の挨拶で始まりました。岸田会長からは「災害医療について故藤村聡先生の意味を継いで、災害医療に力を入れていきたい」とご挨拶され、災害医療に対する思いが伝わってきました。新人医師の紹介の後、「災害時における病診連携体制を考える」と題して、相楽医師会の災害時の対応について、山本浩二先生（山本整形外科）より講演頂きました。実際に被災地で活動されたご経験からの話は、とても説得力があり、仮にこの地域が被災したときに、病院職員として“自分ができること”について改めて考えさせられました。



続いては、3 病院（当院、学研都市病院、精華町国保病院）の担当者それぞれより、在宅支援体制について、報告させて頂きました。当院からは、僭越ながら私から報告させて頂きました。この地域の人口推移や社会保障費の推移を踏まえた上で、当院が果たす役割（医療・介護連携強化、周産期・小児科分野の医療提供体制の強化、生活習慣病の予防対策）について話をさせて頂きました。続いては、学研都市病院より、在宅から地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟で受け入れられた事例の紹介や在宅療養後方支援病院の説明をして頂きました。最後は、精華町国保病院より、主に障害者病棟を中心として在宅患者の受け入れをされている報告をして下さいました。3 病院がそれぞれの役割を担うことで地域医療に貢献できるよう、引き続き協力していききたいと思っています。



会議の最後は、吉村院長（学研都市病院）により閉会のご挨拶です。吉村院長からは、この地域はこれまで顔の見える関係作りが構築できていたが、一層進んだ“腹の見える関係”（本音で言い合える関係）を構築することが、この地域の病診連携推進に繋がるとのお話を頂戴しました。

岸田新会長のもと、地域の先生方との連携を継続してまいりますので、引き続きよろしくお願い致します。（地域医療連携室 室長 南出 弦）

認知症家族教室を開催しました

～ 助ける人を助ける ～

認知症疾患医療センター
認知症家族教室のご案内

認知症を持つ人を介護するご家族を対象に、認知症についての理解を深め、家族同士の交流を目的に開催します。

日時 2023年8月30日(水)
14:00～15:30

会場 当院 9階 会議室

対象 認知症患者さんを介護中のご家族

第1部 14:00～14:30
認知症について知ろう
講師：大島 洋一

第2部 14:30～15:30
家族交流会 (脳神経内科部長)
ご家族同士で日頃の悩みを相談しましょう。

※当日、発熱のある場合は参加をご遠慮ください。

お問い合わせ・お申込み
裏面のお申込み用紙をご確認いただき、お電話か、FAX、
直接持参でお申込み下さい。

京都山城総合医療センター
認知症疾患医療センター
担当：中嶋・谷川

☎ 0774-72-6363
FAX 0774-72-8891

8月30日(水)、認知症家族教室を開催いたしました。感染症流行による中断を経て、実に4年ぶりの再開となりました。参加者は認知症の人を支える家族さんです。がん患者さんを中心とした緩和ケア領域では、「家族は第2の患者」と言われ支えが必要な存在です。私は認知症も(おそらくはすべての病気が)同じであってほしいと願っています。

当日は参加家族の自己紹介からスタート。第1部は、脳神経内科大島洋一部長によるミニ講演「認知症を知ろう」でした。認知症は病気

である事、一つの病気であっても様々なタイプがある事、認知症治療薬の最新情報、食事や生活習慣で気をつける事、病気と分かってから大切な心構えなどお伝えいただき、家族さんは熱心に耳を傾けておられました(地中海料理といわれる食事が参考になるとの事)。長谷川式認知症スケールで有名な長谷川和夫先生自身が認知症になられた体験(『ボクはやっと認知症のことがわかった』)から、「認知症者は日によって調子が変わる事・できる事はさせてあげてほしい事・褒めてほしい事・笑顔で接してほしい事」など、認知症患者さんの本音を垣間見た思いです。



さて、第2部は「家族交流会」です。4年ぶりの開催で参加者が集まらないのでは? という私の心配を吹き飛ばすように集まっていた8名がそれぞれの思いを語られました。

「こんなことを悩むのは自分だけではないか」「また怒ってしまった」「今日はデイサービスに行ってくれるだろうか」「妄想につきあいきれない」など日々揺れ動く気持ちを打ち明けてくださいました。そのどれもが、ひたむきに介護をされている上での言葉だとわかりますから、誰も批判も否定もしません。長年介護されているご家族からは、認知症がどの段階にあっても悩みは尽きないが、「本人を怒らない・否定しない・驚かせない」などが大切というお話がありました(そして、それがどんなにむづかしいか)。「忘れる」と考えるより「覚えられないんだ」と気づいてから、心が楽になった。毎日食事を考える事は大変だが、これは家庭で献立を考える主婦が常にしている事だったと気づかされた。介護者は頼れる時は甘えられるようになってほしい・支援者に頼って構わない。信頼する支援者の言葉かけ(あなたが元気なうちに決断することも大事)が支えとなっている、などありました。また、本人から不意に「ありがとう」と言葉がこぼれた時、自分自身がいつも本人に笑顔で接しようと思ったという発言は忘れられません。家族さんからの話は尽きませんでしたが、惜しくも時間切れでお開きとなりました。「思い切って参加してよかった」「勇気をもらいました」というアンケートを頂戴し、昨年从中嶋MSWと苦心しながら開催にこぎつけて良かったと思います。再開に伴うお知恵をいただいた、京都府立医大附属北部医療センター認知症疾患センターのご担当の方にもこの場を借りて御礼申し上げます。

(地域医療連携室 公認心理師 谷川 誠司)